

戦略的視点からの日本宣教再考 —— 一福音主義学徒の提言 ——

有賀喜一

序

日本のキリスト教界指導者たちは、その時、対処する備えが来ているだろうか¹。

未来完了形思考の勧め

『これから5年後に、2千万人の日本の人々が神の国の民として迎えられ、各教会が礼拝者で溢れ、新しい教会が増殖され、あらゆる年代の人々、あらゆる社会の階層の人々がキリストによって造り変えられて、遂には社会そのものが、霊的、構造的、そして文化的にまで変革する福音化が起こったら、どうであろうか。日本のキリスト教界の指導者たち、各教会の牧師たち、役員たち、そして聖徒たちは充分受け取められるであろうか。日本には神が既に祝福して、高い教育水準、高度な技術、豊かな財源がある。神は確かにこのような驚くべき大突破を日本を通して現そうとしているのである。』

このように言われたのは、アメリカのフラー神学大学院、キリスト教指導者論の教授、ロバート・クリントン博士である。クリントン博士は、日本教

会成長研修所²の創立10周年記念講演に来られて、『未来完了形思考』³を紹介されて、私たちにパラダイム・シフト（視点の転換）を強く迫られたのである。

私が1971年から72年にかけて、フラー神学大学院の世界宣教と教会成長学部留学し、ラルフ・ウィンター博士のもとで、「キリスト教拡大史」⁴を学び、キリスト教会史とは、別な視点を、文化人類学的、社会学的、そして宣教学的に見るように導かれたのである。

旧約、新約時代、初代教会時代から現代までに、神による画期的なみわざが起こされて来た時を観察すると、4つの特徴を見出すのである。

1. 福音に対して反抗的であった人々が、突然受容的になること。
2. 新しいキリスト教の形の出現である。福音の核心を変えずに文脈化が進んで、人々が回心し易くなること。
3. 短期的に驚くほどの多くの人々が覚醒され、キリストに回心し、生きた教会員として教会に加えられること。
4. 福音の力の解放で、みことばの宣教で霊魂が回心し、イエスのみ名に

² 日本教会成長研修所は1979年、LIFE (Language Institute For Evangelism) の日本での最重要な貢献は、牧師養成に焦点を置いて企画された。初め、米国での3ヶ月間の研修から始まり、その後フラー神学大学院教授ロバート・クリントン博士のカリキュラムデザインによって、2年間の研修が、国内で原則として、各教派団体から12人が選ばれ、聖書の教会成長の理論と実際を学び、自分の教会を見直し、神のご目的に合わせた自分の教会への新しいビジョンに基づいて、具体的な成長計画書を、信徒と共有して、短期的、長期的に実践し、リーダー養成と教会増殖し続ける聖書的な教会の建て上げを目的とするものである。

³ ロバート・クリントン博士の未発表の論文『Future Perfect Thinking』(1991)。聖書信仰に立つならば、キリストの再臨を信ずるのである。主の再臨の時には、キリスト教会は主の花嫁として完全に整えられ、世界宣教は達成されていると信ずるのである。主の再臨の日時は、ただ父なる神だけがご存じであるが、未来の特定の日があることは信じ、その時までには神の教会と世界宣教に対するご計画は完了しているということで未来完了形思考と名付けられているのである。

⁴ Kenneth S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*, Volume 1-7 (Harper & Row Publishers, 1970).

¹ フラー神学大学院、キリスト教指導者論教授論文『Future Perfect Thinking』(1991年)に基く講演での問いかけ。

よって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、病人のいやし（マルコ 16:15-18）が伴うことである。

私たちは、大きな規模ではなかなか見られないが、小さな規模で、それぞれに確かに神の生きたみわざとして体験しているのである。これから思い切った神の新しい事（イザヤ 43:19）、わたしたちの知らない、理解を越えた大いなる事（エレミヤ 33:3）を期待する時に、次のような観察を見出すのである。

1. 歴史的な大突破は、一般的に初まりはキリスト教の主流からではなく、キリスト教の支流と思われた群から（エルサレム教会ではなくアンテオケ教会から世界宣教が実現されたように）その働きが始まっていること。このためにキリスト教界の主流的指導者たちは、このような歴史的な神のみわざの展開が起こって来た時に、正しく認識し、喜んで受け入れて、単に見過ごさないようにすることを指摘するのである。
2. 歴史的な大突破は、その歴史的教訓としてパラダイム・シフト（視点の転換）をしなければならないことに気付かせられるのである。使徒の働き 10 章にあるコルネリオとペテロの引例のように、異邦人も神に受け入れられること、そして彼らはやがて異邦の世界に神のメッセージを伝えるセンターになることという視点の転換である。
3. 歴史的な大突破は、さらに、伝統的指導と伝統的構造に代って、新しい文脈化された福音の適用によって新しい指導と新しい構造が展開してくるのである。
4. 歴史的な大突破は、効果的な指導者は、大胆な神の御意による前進のために、時には危険を自覚しつつ、信仰による冒険に挑戦することを教えるのである。バルナバはアンテオケで、大胆にも急激な回心をしたパウロを探し出し、自分の側に置き、自ら模範となり、実地訓練し、責任を委譲して、危険人物だったパウロを見事に世界宣教の器と造り上げ、宣教のパラダイムを新しく構築したのである。

以上のラルフ・ウィンター博士のキリスト教拡大史と、ロバート・クリントン博士の未来完了形思考の挑戦から、大突破の4つの特徴、4つの観察を教えられ、大きなパラダイム・シフト（視点の転換）をさせられたのである。

神が日本に大突破（リバイバル）を計画していて下さると信じ、そのために必要な戦略をともに考察しようとしているのである。

以下に、個人的な視点と関心から、日本宣教の今後の可能性について述べさせていただく。日本の宣教のための聖書的教会の建て上げを戦略的に、リバイバルを推進して、21世紀に、この日本で現実のものとなり、日本を通して神の栄光が顕されることを切に願う者である。

1. リバイバルとの出会い

1. 1947年12月31日、真剣にまことの救いを求めてお寺に向かっていった私が、クリスチャンの友人に無理矢理連れて行かれ、クリスチャンの家庭で持たれていた除夜祈祷会で、中村秀雄さんの生きた証しと、スウェーデン宣教師、カール・グスタフソン師（中国奥地伝道に40年間奉仕していたのが、共産化した中国から追放されて来日）の単純明解な福音の提示で、神、人間（自分）の罪、キリストの十字架と復活による救い、そして悔い改めと信仰による即座の救いの体験にまで導かれ、その夜、涙をもって罪を悔い改め、イエス・キリストへの信仰によって、聖霊による新創造の恵みに与ったのである（II コリント 5:17）。さらにマタイによる福音書 9 章 2 節のみことば『子よ、心安かれ。汝の罪赦されたり』（文語訳）で生涯疑うことのない聖霊による聖言に立った救いの確信にまで導かれたのである。後日、知らされたのであるが、中村秀雄さんは、1930年代の日本でのホーリネス・リバイバルの器、中田重治師を通して救われたリバイバルの火の子であり、スウェーデン宣教師は、1901年、アメリカ、カンザス州トペカのベテルバイブルカレッジにおけるペンテコステ、さらに1906年のカリフォルニア州、ロスアンゼルス市アズサ・ストリートのリバイバルの大波がやがてスウェーデンに燃え上り、その中からホーリネスを強調するスウェーデン・ホーリネス・ミッシ

ョンが生れ、そのリバイバルの中から中国へ、そして日本に導かれて、私にまで及んだのである。その宣教師は、いつも『私はリバイバルの炎の中で生れたから、くすぶる煙には耐えられない!』と言っておられ、聖潔と宣教に燃えておられたのである。

2. 関西聖書神学校に 1954 年入学して、毎週火曜日夜の定例祈祷会、毎月第 3 金曜日の徹夜祈祷会、毎年 9 月の 3 日間の断食祈祷会での沢村五郎校長のリバイバルにかける渴きと熱祷は、卒業するまでの 4 年間を通して燃え上り、卒業してから今日も尚続いているのである。沢村五郎師は 1977 年 7 月、満 90 才で召天された時、最後の叫びが『リバイバルを!』であった。その年は、私が母校の関西聖書神学校、第三代目の校長に就任した時であり、私も初代校長のリバイバルスピリットに燃えたのである。今も燃え続けて変らない。

3. 1962 年 4 月、4 年間の栃木県大田原市での開拓伝道と教会の建て上げの後、フルタイムの伝道者として、既に本田クルセードとして全市協力伝道に立ち上っておられた本田弘慈師とともに、日本をキリストへのために献身したのである。『霊に燃え、主に仕えよ』(ロマ 12:11) で生涯貫かれた福音の勝負師、リバイバリストであった本田先生との 15 年間、日本全国 250 都市でのクルセード。夜の集会とその前の時間のお友だち伝道で、合計 200 万人に福音を宣べ伝え、決心者は 40 万人を超えていたのである。そこで強く知らされたことは、伝道者は、決して当たり、外れの説教をしてはならないこと。必らず、毎回、神が用意されている靈魂の救いの実現のために、真剣に勝負しなければならぬということであった。毎回集会の前に、先生と床に頭を擦りつけて祈り抜いたものである。『火は絶えず祭壇の上で燃え続けさせなければならない。消してはならない』(レビ 6:13) と、聖潔の徹底と祈祷の生涯に打ち込んだのである。リバイバルの火は自動的ではない、常に自ら心して謙り、自己の無能、神の全能に依り頼み、万事聖霊、万事祈祷で(ピリピ 3:3、ゼカリヤ 4:6) 生きる時に、天よりの豊かな油注ぎがあり、主がその奉仕に栄光を顕されることを知らされたのである。

4. 1971 年、フラー神学校の図書館で、山森鉄直師のデューク大学で取得された博士論文、「日本の教会成長」を読み、日本でも 3 回のリバイバルがあった事を知らされて、不思議に燃え上る経験をしたものである。第 1 回は、1883 年の「同志社リバイバル」と名付けられた、ミッションスクールアプローチによるリバイバル。第 2 回が、「全国協同伝道」⁵、並に、「20 世紀前進運動」という 1901 年から 1904 年までの 3 年間、「日本基督教会同盟」が結成され、教役者と信徒たちの伝道チームが編成され、日本全国で、集会数 3,336 回。聴集 618,647 人。決心者 21,152 人という日本宣教の大きな前進を祝ったのである。第 3 回が 1930 年代の中田重治師によるホーリネス・リバイバルである。4 年間でホーリネス教会は 7 倍に成長し、教会未設置の各県に、そればかりでなく、日系人の移民している世界の至る所までも宣教を拡大したのである。私は、自分の使命としている日本の福音化のために、既に 3 回もリバイバルが記録されているこの論文を発見し、遂にこれを日本語に訳して、いのちのことは社から出版したのである。このことは、私を奮起させ、どうしても日本に第 4 回のリバイバルを主からいただくことと固く決意させたのである。

5. フラー神学大学院 (1971-72 年留学) のクラスには、75 人の神学生が全世界 35 の国々から来ておられ、自分の国の伝道の実情が発表されたのである。アフリカのケニヤは、当時既に 65% がクリスチャンであるといい、アフリカの諸国は軒並みに 80% 近い人々にリバイバルが継続的に起り、ブラジルをはじめラテンアメリカの各国で人口増加率よりもクリスチャン増加率がはるかに大きく、社会の不安の中で、キリスト革命が起こされていたのである。1971 年クリスマスシーズンに、3 週間かけて、6 つの中米を訪問し、自分の目で浸透伝道⁶の目覚ましい結果を確かめることができたのである。

⁵ 海老沢有道、大内三郎共著『日本キリスト教史』(日本基督教団出版部)、465 頁

⁶ 浸透伝道 Saturation Evangelism。世界で初めて 1959 年中米のコスタリカで伝道していたケネス・ストラッカ師による提唱された「深みの伝道」に始まる、信

特に「深みの伝道」本部があるコスタリカでオーランド・コスタス師を通してその理論と實際を講義していただき、併せてその働きの現実を見て、日本の総動員伝道のモデルを体験したのである。

6. 1972年4月から5月にかけて40日間、アフリカのケニヤで、ディスター・コミュニケーション主催の「キリスト教伝達学と教会成長」国際研修所で特別研修が許された。アフリカ、ラテン・アメリカ、アジアからの各ミッション代表者たち、若手のリーダーたちが生活を共にして、学際的な学び（神学的、実際の二面を合体した貴重な学び）を受け、リバイバルを体験している人々の生きざまを現場で確かめられたことは、大きな霊的遺産となったのである。尚幸いにもここで取得した研修は、フラー神学大学院の学びの単位に認定され、二重の喜びともなったのである。

7. 1974年の韓国でのExplo. '74、1992年から連続5回のアルゼンチンでの「収穫伝道国際研修会」⁷、オーストラリア、シンガポール、台湾、ガテマラ、中国、モンゴール、ネパール、マレーシア、ミャンマー、カンボジア、スリランカの国々での「指導者養成研修所」を通して、『神がその中におられないなら、絶対失敗に終るといふ位の大きな事を、神のために試みよ』⁸とい

徒を生きさせたキリストの証人として整え、社会のあらゆる階層に福音をもって浸透していくという伝道戦略の総称。日本では「総動員伝道」と名付けて、1970年四国から実践されている。1974年のローザンヌ世界宣教会議で最も注目された当時の伝道戦略として紹介されたのは、ジェームズ・ケネディ牧師の「爆発する伝道（Explosion Evangelism）」と「浸透伝道」であった。

⁷ Harvest Evangelism International Conference. Harvest Evangelism Int. 代表エド・シルボソ牧師。現在本部は米国北加、サンノゼ市にある。毎年、1991年から現地アルゼンチンで国際研修会が開かれている。最近では、地域全体に変革をもたらすトランスフォーメーションを力強く推進しておられる。

⁸ Haggai Institute（第3世界のリーダー養成国際研修所）創立者、ジョン・ハガイ師のことば。「Attempt something so great for God, it is doomed to failure unless God be in it.」1989年ハワイ研修の時、直接お聞きして以来、個人的に大きな挑戦のことばとなっている。

う挑戦を、それぞれの国の指導者たちが真剣に取り組んでいるのを見て、日本に対する大きな重荷を実感しているのである。アルゼンチンではその収穫伝道を通して過去100年かかった分を、4年間で成就し、ある都市では市長、市会議員たち、実業家たち、教育界の指導者たち、病院の医師、看護婦たちがクリスチャンとなり、社会まで変革されるというトランスフォーメーションが起って来ているのである。私もその代表的な都市、マーデルプラタの変革の事実を目で確かめているのである。その他ガテマラのアルモロンガ市では、福音によって個人、家庭、社会が変えられたばかりでなく、自然界まで荒廃から3倍の収穫を得る祝福の地とまで変えられ、地のいやしを実現しているのである。「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。」（II歴代7:14）。

II. リバイバルの定義

1971年フラー神学大学院のクラスの一つに、エドウィン・オアー博士の「リバイバル」があり、そのクラスの資料として提供していただいたものの中からいくつか紹介すれば参考になると思う。

1. ウィリアム・B・スプレーグ

「どこにおいてであっても、信仰が比較的沈滞している状態から活力を増してくるのを見るなら、またキリスト者であると公言している者が義務に対して今まで以上に忠実になり、人々がこの世から出て、新たに教会に加わり、それによって教会の力が増大するのを見るなら、その状態はためらうことなく信仰のリバイバルである。」

2. チャールズ・フィニー

「神への従順の新しい開始に他ならない。回心した罪人の場合のように、最初の一歩は深く悔い改め、心砕かれ、へりくだりと罪の放棄とをもって神の御前にちりのようになること。」